

# 戦争に明け暮れた日々

●松ノ木二丁目

清水 錦子

(昭和三年生まれ)

ウーウー警戒警報発令！ やつと温まったふとんを出ると洋服を着て救急袋をかけ、防空頭巾をかぶって玄関の戸を開け放ち、じつと腰掛けて待機する。防空班長の父は、とび口を持って、各家の防火用水の氷を割って歩く。「空襲警報」。すぐ近くの小学校の屋上で父の乱打する鐘の音。「早く交替しておいてくればいい」と祈るような気持ちで聞く。やがて敵機が爆音とともに通り過ぎる「警報解除」。寝巻に着替えると、冷たくなったふとんへもぐり込む。

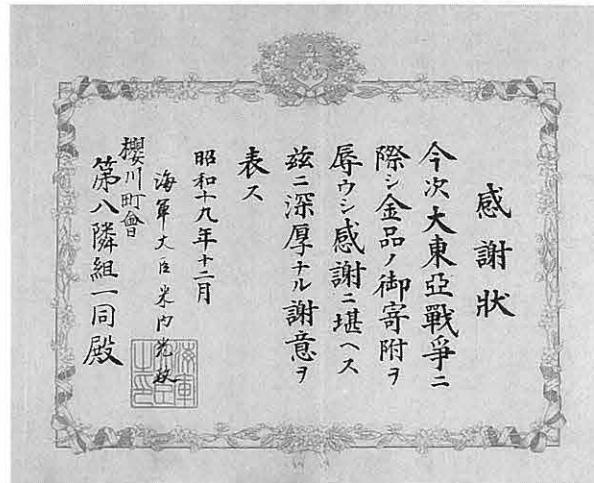
温まったころまたサイレンが何回も繰り返すうちに、そのままの服装で寝てしまうようになった。そんな毎日の中にも女学校の卒業を間近にひかえ、登校していた日の朝、赤坂あたりで馬上に軍服姿の東條さんをよく見かけたものである。ただ勝たねばと、何もわからず敵に勝つ事だけに夢中だった。学校工場で通信機の組立てに一生けんめいで、四階の窓から遠くの青空にくっきりと銀色に輝きながら通り過ぎるB29を美しいと見送ったり、防火訓練でバケツリレーや軍事教練を繰り返していた。

慰安会があつて歌舞伎座へ集まり、楽しい演芸の最中に空襲警報が発令され、日比谷の通りで何回も防空壕に入りながら虎ノ門の我が家へ帰りついたこともあつた。たまにデパートへ行つてもガラシとして、ショーケースの中もほこりだらけで、配給の晒木綿さらしがポツンと置かれていた。品物の溢れている現在、どうしてもそのころの光景が思い出される。

三月九日夜、下町の空が真赤に見えた。今考えるとあんなに近いのに、同じ空の下で多数の人が亡くなるなんて信じられない。同級生のIさんは、お母さんが「すぐにあとからいらっしゃい」といって避難したのに、朝になつても来なかつた。焼け跡へ行くと、庭にあつた小さな池の水たまりに体の下にお手伝いさんをしつかりかばうように亡くなつていた。その手にはバケツが焼きついて：一緒に焼けた弟さんは焼けおちた屋根の上でばんやりしていた。手にはやはりバケツが焼きついていた。全身火傷で次の日に亡くなつた。Iさんの顔はきれいなままだつたという。あのころの私たちは、火が出たら逃げてはならず、消し止めることと教えられていた。

煙を吸い込んで倒れてしまう事など教えられていなかった。すぐに逃げれば助かったのに、教えを守り必死に火に立ち向かい煙を吸い込んで倒れてしまったのだろう。私たちはその状態になれば誰もが同じことになったわけだ。父も焼夷弾の落ちた天井をはがし、日ごろの訓練をいかしてバケツで水をかけ消し止め、何軒もの家を残した。

あれから五〇年近く、あまりの変わりように、何もかも感謝の毎日である。級会に集まると、「戦争はいやね。本当に今は幸福ね」と、毎年の事ながらきつとその言葉が出る。死ぬまで思い続けることだろう。



大東亞戰爭で寄附したことに對する感謝狀

〈提供 清水錦子さん〉

# 東京大空襲の被災体験

● 久我山五丁目

白鳥 とく

(大正五年生まれ)

昭和二〇年五月、私は医学校の一年生で今の地下鉄神宮前駅の裏あたりの友人の家に下宿していた。二五日の正午ごろ外出から帰って来たBさんが「荏原、えびすが昨夜の空襲でやられた。ひどいよ。牛も焼け死んでその肉を皆で削っていた」等と話すので、武蔵小山で寮生活をしている義弟のことが心配になり、食事もそこに渋谷駅まで来たが電車は不通、線路に沿って歩く。えびす駅あたりは一面に焼けて未だぶすぶす燃えている。防空頭巾を濡らして駆け抜けた。幸い寮も義弟も無事だったが、会社が焼けて大騒ぎ、皆真黒になって活躍していた。私は明日の事があるので直ぐ引き返した。

さすがに疲れて、下宿の茶の間に座り時計を見ると九時五〇分だった。その時何とも無気味に空襲警報が頭上を襲った。友人と食糧その他を防空壕に入れ、土を被せていると「火事だ逃げろ」と表を人々が駆けて行く。友人が隣に火がついたと叫ぶ。私は本だけは焼くまいと用意していたリュックを背負い、頭巾を濡らして飛び出した。するとB29の轟音が響いている。見上げるとすーっすーっと黒いものが落下して空中

でパッと分解し、何十何百の光の雨となって落下して来る。それは綺麗な焼夷弾だった。次の瞬間B29は急降下、真黒い服で黒眼鏡だけの顔が機銃掃射してワッと追ってきた。慌て垣根に身をひそめたこの僅かの時間に、友人の姿を見失ってしまった。表参道の所まで来ると逃げて来た人いっぱい、青山墓地へ行こうとすると、道路が着い炎となって燃えている。神宮にしようとなんか分けに行くと、両側の家が燃えて紅蓮の炎が地を舐めている。この時私は自分を落着かせることが出来なかった。暗い方へ、闇の建物へ入れば良かったのに、人の見える家に駆け込んで行った。でもそこに同宿の早稲田の学生さん夫婦がおり、ほっと人心地がつき、急に本の入ったリュックが重くなり降ってしまった。そして表を見ると、たたずんでいた背の高い男性がブーツと火柱となりいなくなってしまった。私の頭がスーッと冷たくなる。二階から「棟が落ちる」と叫んで四、五人かけ降りて来て、火の粉のふる家の外に出て行った。

学生さんはと見れば、二人うずくまっている。「逃げましょ

う」と私はリュックはそのままにして外に出た。その途端に烈風に攫さらわれてどこをどう走ったのか、気が付いたときには、コンクリートの用水にしがみついていた。中に女の子らしい人が入っていて、水があるという。逆さになり頭巾に水をかけて右足を入れたが、左足を入れる気力はなく倒れてしまった。女の子が「ここにいっても大丈夫」と聞くので、「大丈夫」と言ったと思うのだが意識を失ったらしい。

煙を吸ったためだったのか、どの位の時間が経ったのか、カタンコトンと人の足音らしい音をもすごい痛みの中で聞き、生きていたのだと思った。ぼんやりと道路があり、しらしら明けてあった。立ち上ろうとしたが体が動かない。「小母さん、もう出ていいですか、寒い」と女の子の声がある。「大丈夫らしい。人のいる所へいらつしやい。私は動けないから」と言うとう水から出て行く気配をかすかに覚えて、私はまた何も解らなくなった。「白鳥さん、白鳥さん」遠くで呼ばれて気が付く。頭がぼんやりしていたが、二年生の方だと思ふ(医専も焼けて講堂で一年二年は一緒の講義だった)私が本をお借りした方だった。「動けないんです」と言うと、「怪我をした人のいる所に行きましょう」と背負われて来たのは強制疎開の跡のようでした。

そこにどの位いたのか、また背負われて随分遠かったのに、私は苦痛でお礼も言えなかった。救護所は表参道の角の住友銀行でした。軍のトラックが三台、亡くなった人を積んでいる。あの大勢いた人たちのだろうか。銀行の中に友人が救

護班で「あら白鳥さん大変」とかけ寄って来たので、二年生のMさんは安心したらしく帰られた。

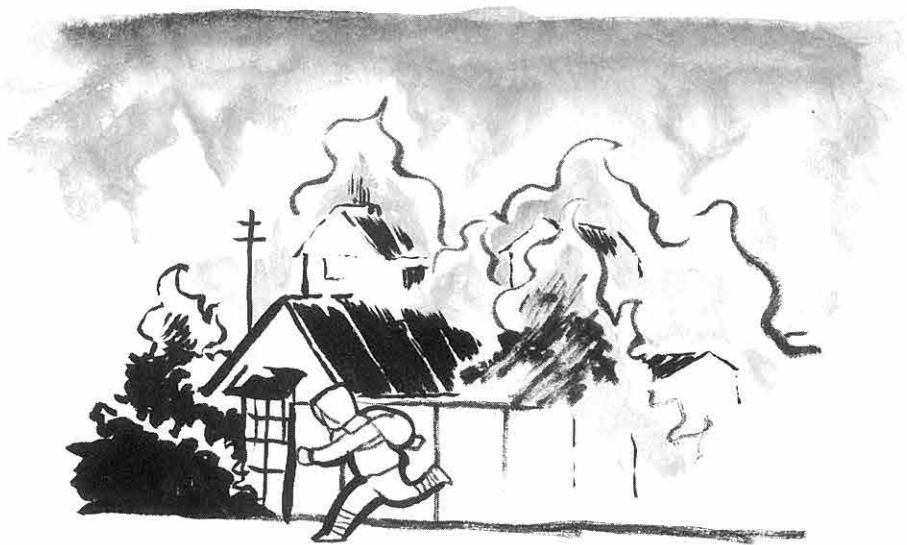
私は応急処置を受け、日赤病院に運ばれ、入れられたのは講堂でベッドはない。唯、見渡す限り人が寝ていた。呻き、騒ぎ、時に叫ぶ。私も交えて文字通りこれが生き地獄というのでしよう。後で聞いたのですが、日赤にも三千何発の焼夷弾が落され、病院総出で消火したが何棟か焼けた。その焼け跡の彼方此方に山と積まれてある焼夷弾を私も胸塞がれるような思いで後で見た。入院して二日目ごろか、今は亡き妹が捜して病院に来てくれる。私は両手両足、顔の火傷、殊に左足のアキレス腱は焦げていたとか。骨髄炎になり、破傷風になり、左足を二度切断し、臨死体験を三度して今七五歳、思えば昭和一九年の秋、東京の晴れ渡った雲一つない空に美しい飛行機雲を描いて悠々と飛んでいた飛行機を愚かにも綺麗と眺めていたが、アメリカが偵察していたとは夢にも知らなかった。三月一〇日の大空襲で失った幾人の友人、知人、辛うじて助かった知人の目の中まで焼けただれた皮膚、表参道の惨、日赤病院の阿鼻叫喚、それらもろもろがいつでもふつと浮んでは消える。

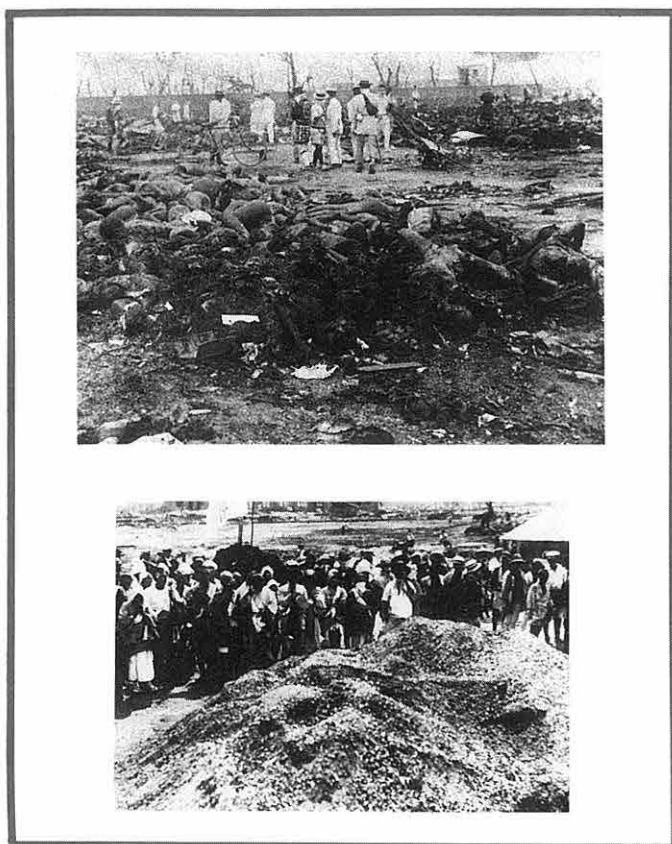
今一度日赤病院に戻ると八月一五日終戦の詔勅を病院で聞き、何が何だか解らないながら戦は終わったのだ、今夜からは灯火管制はないと心安らいだ。翌日何となく病院中がざわめいて、誰言うもなく看護婦さんが脱走した。それも一人二人ではないと言う。みんな動けない患者ばかり死地を潜って

来たというのにやはり心さわいだ。アメリカ兵が上陸して来ると若い人たちは何をされるか解らないということらしい。私も妹が付添ってくれていたので、義弟が心配して会社の自動車で無理に退院して、千葉県香取郡の生家に連れ帰らされた。しかし世間の心配したような事は皆無ではないかも知れないが起こらなかった。

私たちは戦の負のみを思い、相手に与えた罪を感じなさ過ぎると言われる。慰安婦問題等それを否定する事は出来ない。また中国を旅した時、湖南でいまだに抗日の横断幕が張られていて胸突かれた事もあった。けれど戦後四七年障害者になつて生きて来た事もまた胸迫るものがある。そしてしみじみと戦争の残酷さを思う。

目を上げると柘植つげの若葉に小鳥が二羽遊んでいます。今ここにある幸をおもいなさいと言うように。





〈区立郷土博物館所蔵〉

# 風雲急を告げて

●和泉四丁目

竹沢 芳子

時として爆音の響かない日には、子供たちを外に連れだす。ありがたいことに自然がいつぱい残っている地方なので、折紙の代わりに木の実や葉っぱや小石などで、いろんな物を作って遊んだ。工作に飽きると、河原の一角に幾つも積んである蛇籠の上に乗ったり降りたりして戯れる。すでに新聞、雑誌の類は反古さえも無くなっていた。幸いプラタナスの樹があり、その大きな葉でみんなの鼻をかんだりお尻を拭いたりしていた。

近くにある碓氷川の深々と水を湛えて滔滔と流れる様は、かのアマゾンの流域もこのようではないかと想像される。いかにも牧歌的で絵のような素晴らしい風景は、今もお心の底に鮮やかに残っている。こんな暗黒の世にせめて子供たちと過ごすひときは、さながら砂漠の中のオアシスであり、また一服の清涼剤にも似た救いであった。

戦局も酷になり、昭和一九年春私は、群馬県の恩賜財団軍人遺家族の寮に赴任していった。入寮者たちは遺族ばかりでなく、遠い戦地で生死もわからぬ夫を待ちつつ暮している者も

いた。

ある昼下がり、突然空襲のけたましいサイレンが鳴り渡りだした。慌てて最年少の子を背負い、もし弾に当たっても被害の少ないように、ねんねこを着て、他の子らと急ぎ外の樹々の陰を伝い夢中で逃げた。一瞬、ドカーンと凄まじい音響がして咄嗟に地べたに、ひれ伏した。ままよ、不運にも、やられたら、この子らと死をともしにする悲愴な覚悟であった。暫し後、爆音の遠ざかるのを確かめて、やおら起き上がりホッと一息したが、背中の子は泣きだすし、一時は胸の詰まる思いで生きた心地もなかった。

田舎といえども食料は乏しく、配給だけでは育ち盛りの子供たちは、ひもじいので仕事を終えて夜、大分はなれた農家の家にお金を出して「お芋でも何でも、よいから少しでも分けて下さい……」と懇願した。奥からオカミさんが出てきて「お金なんか要らんからべべでも持って来い！」もう二度と来るな！と凄い見幕でピシャッと戸を閉めてしまった。いかにも、うらぶれた哀れさに、その場にうずくまって泣き崩

れた。

寮全体が薄暗く灯も無いので、だだっ広い仕事の間はもつと、まるで牢屋のようだった。みんなが余り可哀想なので、私は上京して手持ちの絵本や紙芝居と重い積木一揃をしょって、混雑で振り落されそうになった列車でやつと運んできた。だれも木偶の坊のように無表情だった子供らも明るい顔になつて、とても喜んでくれた。私は苦勞して持ってきた甲斐があり大いに嬉しかった。そんな状態で私物など衣類一つ持たず常時もんぺの着たきり雀だった。

やがてあの三月一〇日の大空襲で、当時陸軍の要塞地帯にあった実家は丸焼け、と風の便りに聞いた。直ぐ東京に残してきた母に手紙を送った。しかし「行方不明」と貼り紙付きで戻ってきた。もしや母は焼け死んだのではと不安とショックで重度の神経衰弱になり寝ついてしまった。優しい寮生が、お粥と梅干を差し入れてくれたが、てんで一口も食べることができず、ただうつろに天井ばかり眺めての明け暮れだった。そのうち、今ここでのたれ死にしては、これまでの生きざまを考えたら魂も浮ばれまい、と気を取り直して懸命に起きられるよう努力した。

やつと元気になれた、ある時、勤勞奉仕に参加して開墾に行つた先で、毒虫に腋の下を刺された。戦時下で良い薬も無くデルモライツなんてセメントみたいのを塗っていたが、ちつとも治らないので、いよいよ上京する。知るべを頼つて、まず母の安否を尋ねると、Y地区の親戚にいる母の生存を知

り安堵する。

次の日さっそく病院に行くと「これは淋巴腺に広がって命とりになるから」といつて即座に手術された。それが麻酔もかけずに生身の体をぎりぎり切り刻まれ、もう断末魔の苦痛に必死で耐えた。更に入院もできず、手当の不完全からか肩から吊つた包帯は血染めになり、治るまで痛いのを我慢しての通院の辛さは例えようもなかった。

ほどなく終戦となり、もし全快したら、また職場に復帰しようと思つていた矢先、度々罹災と疾病による長期休みがもとで、休職と言う体のいい形で解雇された。随分と身を挺してきた積りだったのに、不遇の弱者に世間の風はにべもなく冷たい、とつくづく思い知らされた。

この地球上に、ひたすら平和を願ひ、もうあんな痛ましくも悲惨な戦なんて、しわざは二度と再びやって貰いたくない、と切に念じる。



# 東京大空襲の体験

●下井草二丁目

竹中 澄子

(大正一五年生まれ)

昭和一六年一二月八日に太平洋戦争が始まり、緒戦は日本大勝利で賑わったが、翌年には米軍の反撃が盛んで、日米の戦力は逆転してしまった。日本の経済力は底をついて、国民は食物も着る物も無くなり、「欲しがりません勝つまでは」と言い聞かされ、歯をくいしばって食うや食わずの生活に堪えていた。青年男子は赤紙一枚の通知で兵士にとられ、やがて学生、生徒にまでも勤労働員がぐだり、軍需工場に駆り出された。

私は昭和一九年の春から、都立第七高女の学徒動員で同級生約二〇〇名と、向島の大日本兵器で海軍の機関銃の弾丸製造の工員となった。初めは検査の軽作業であったが、次々と男子工員は応召されて、女子が直接に油にまみれて機械を動かすように変わっていった。

昭和二〇年三月九日、私は夜勤で旋盤機せんぱんの作業をしていた。夜中の一二時に警戒警報が発令され、すぐに空襲警報となり、私たちは防空壕に入ったが、今夜は大空襲らしいので壕を出て退避するようにとの指示が出た。防空頭巾の紐をしめ直し

防空袋を肩から下げて、隊を組んで工場の外に出た。真暗な空にはサーチライトの光が交差しB 29の姿が見えた。照明弾がふわふわと落ちていと思う瞬間、すさまじい轟音ごうおんとともに焼夷弾が落ちてきた。私は夢中で軒下に隠れ、少したつて出てみるとあちこちに火の手が上っていた。友達はばらばらになり、私たち四人で逃げ歩くことになった。とにかく学校へと大勢の人が右往左往する中を吹き荒れてきた風を背に急ぎ足で歩いた。中川放水路の橋を渡り振り返って見ると、火の手を遠く離れたようでホッとした時、土手下から「休んでいったら」との声がかかってそこで少し休ませて貰ったが、渦巻く風は思いのほか火の廻りを速め、対岸から火の粉が激しく飛んで来るようになったので、礼を言っててそこを立ち去った。

学校近くまで行くと、一帯は火の海で道はふさがれていた。それなら小松川橋を渡って荒川を越えようとしたが、橋の手前は逆巻く炎で近寄れず、現在の京葉道路は荷物をかついで逃げる人たちであふれ、歩くのが困難だった。とにかく火か

ら逃げようとどこを歩いているのかわからぬまま夢中で歩き廻り、気がつくとも船堀橋が目前だった。荒川を越えると一変して静かな夜の世界があった。思い出すままに今井の友の家をたずねて朝まで寝かせていただいた。友達三人は市川の住人だったので、それぞれに帰っていったが、私は前年に家族が福島へ疎開したので同様な友とふたり工場の寮に入っていて、北海道の挺身隊と同室だった。寮の人たちは、私の荷物とは、遠い道を工場へ戻ることにした。

私たちが逃げた時にあった家はどこも焼きはらわれて、まだくすぶり、すれ違う人たちの顔はすすり、眉毛・まつ毛はチリチリと焼けて目は真赤にただれ、防空服は焦げ、足をひきずりながら歩く姿に恐怖を感じた。たどり着いた工場は外堀と敷石を残して全部焼け跡となり、私は着の身着のままとなつてしまった。福島へ行こうにも駅も焼けて電車は動いておらず、行く所がないままにまた今井にもどり、電車が動き出すまでの一週間は友の家に泊めていただき、やっと福島へ行くことが出来た。

後に知ったことだが、この日のB29の数は三〇〇機を超え、東京下町の八割は焦土と化したとか。私たちは逃げ足が早かったので無事であったが、夜勤のために自分だけ助かり、家族を全部失った友もあり、家にいて家族と逃げ、火を避けるために川に入り、足をひっぱられて沈みそうになった友もあり、まるで地獄をみる思いだったと語っていた。

昭和二〇年八月一五日、天皇の終戦の詔勅がラジオで全国

民に放送され、やっと戦争が終わった。多数の戦没者、戦災・被災者があったことなど現在の物の豊かな時代に生まれた人々には理解出来ないことのようにだ。多くの犠牲の上の平和を大事にしていきたいと思う。



# 戦争戦災の体験記

●上井草二丁目

中込 サト

(大正五年生まれ)

出生地は朝鮮忠清南道舒川郡庇仁面城内里で、昭和九年一月六日(当時、一八歳)に両親に伴われ、生まれ育った土地を離れ母の出身地である山梨県西山梨郡千塚村(現在の甲府市千塚町)に居住いたしました。

昭和十三年一月より山梨県庁警察部衛生課に勤務、当時の国策であった結核予防の一員として男性とともに従事し、国民学校・中学校・女学校・高等学校・専門学校各卒業生や勤労青少年の体力検査等、結核の早期発見などの仕事は空襲・終戦のその時まで続きました。

昭和六年の柳条湖事件、同一二年から日中戦争と日に日に戦争の色は濃くなり、毎日の生活も苦しくなり物資は順次配給制となってきました。

毎日のように戦地に征く出征兵士、黒い学生服にゲートルを締めた学徒動員兵を駅頭に送るとき、駅前広場に整列した同級生や下級生らが歌うのは必ず「誰か故郷を思わざる」でした。

また無言の凱旋をする兵士を駅頭に迎えるとき、ラッパ兵

士が吹く「海行かば」の悲しい音階にい並ぶ私たちは、涙無しではいられませんでした。

昭和一六年一月八日に第二次世界大戦へと突入し、仕事も生活も大変な時代へとなってきました。

昭和二〇年七月六日夜半、その時、警戒警報は鳴らされず空襲警報が鳴り渡ると同時に甲府市の東北部に照明弾が投下され、続いて焼夷弾が次々と投下、それぞれ空中で三六個に分裂して次から次と雨のように降ってくる。私は当時、市内中心部の柳町に居住していましたので、甲府市の西方を流れる荒川の方向へ逃げのびました。

敵機B29による焼夷弾の波状攻撃により、巷は紅蓮の炎に包まれ、地上ではガソリン・重油・石油・食料油等のドラム缶が破裂して火柱を立て、逃げ回る背後より炎と火花と熱風が追い駆けて来て、体内の水分は蒸発してしまつたように身も心も乾ききつてしまい、荷物や布団を持って走っていた人も順次捨ててしまい、荒川の土手に辿り着いた時には手に何も持っていない人々でした。

荒川の土手に立ってはじめて後ろを振り返り、甲府市内の方角を眺めたとき、空から降ってくる焼夷弾と地上からの火柱と燃えさかる紅蓮の炎、嗚呼、あの灼熱の炎の下で住まいも財産も灰燼<sup>はいじん</sup>となってしまうのだなあ”と思いつながら目の前に広がる様は、幾千幾万の螢が乱舞するが如く美しい光景に「綺麗だなあ!!」と眺めっていました。

七月七日現在で空襲当夜の死者は七四〇名、重傷者三四五名、軽傷者八九四名、行方不明三五名と発表があり、後日の発表で死者が百余名追加されました。

投下された爆弾は二・八キロ油脂焼夷弾、若干の一・八キロエレクトロン焼夷弾、五〇キロ級の油脂焼夷弾との発表でした。

夜半から二時間半位の短い時間で、甲府市内は焼け野原となつてしまい、同時に甲府市に隣接する当時の一町一二か村も被害を受けました。

飛来したB 29は二〇〇機といわれていましたが、米軍の発表では甲府市爆撃出撃機は一三九機で高度一万二二〇〇フィート（約三四〇〇メートル）から甲府市内の六五％に被害を与えたと発表していました。

昭和二〇年六月末に軍司令部からの通達で、七月末から八月上旬ごろには空襲の恐れが強いので、家財道具だけでも市外の方へ疎開して置くように、との指令で市内の家々では梱包して発送の順番待ちをしておりました。私は七月七日の午前一〇時受取りという、順番札を受けて荷造りをしてありま

した。

今考えても不思議に思う事は、迎撃の高射砲が一発も発射されなかった事です。

警察署の焼け跡の庭に戦災証明書を貰いに行きました時に、証明書を持って私の前に立ったのは胸に〇という名札を付けた少年警察官（当時、数えで一八、九歳ぐらいです）でしたが、私の前に近寄り「この度は大変不幸な目に遭われましたが、何卒力を落とさずに頑張ってください」と言つて証明書を渡してくれたあの姿を今でも思い出します。

あの少年警察官はきつと立派な警察の指導者となられた事と信じております。

自分たちで出来るだけの努力は致しましたが、戦後の生活は楽なものではありませんでした。

終戦後の四七年は長い長い道のりでありましたが、悲惨な戦争の時代は決して忘れる事の出来ない歳月であります。これからは人間同士の争いもなく、住みよい社会であつてほしいと思います。絶対に過去の過ちを繰り返してはなりません。

今後の望みは、今まで生きてきたのですから今世紀末を自分の目で見極め、二一世紀の土を踏みしめて紫雲の彼方へ歩いて行きたいと思つております。